週刊粧業

発行所　週刊粧業®
東京都文京区小日向4-5-10
（小日向サニーハイツ501号室）〒112-0006
電話（03）3836-2601
FAX（03）3836-2602

週刊粧業ホームページアドレス
https://www.syogyo.jp
E-メールアドレス
letter@syogyo.jp

©週刊粧業 2026

東西で連合新年会

化粧品産業を再び力強い成長軌道へ

――粧工会・小林一俊会長

日本化粧品工業会（粧工会）と日本歯磨工業会の2団体は1月5日、共同主催による業界連合新年会を開催した。当日は化粧品・日用品業界関係者1243名が出席した。

新年の挨拶に登壇した粧工会の小林一俊会長（コーセーHD社長（コーセー会長））は、「粧工会ビジョン2030に基づき、世界で存在感のある化粧品産業の実現、サステナビリティへの貢献、消費者の信頼性向上を目指してオールジャパン体制で取り組みを進めている。その中でも、イノベーションを支える規制環境や化粧品企業の海外展開に対する支援策は目下、化粧品産業の大きな課題だ」と語った。

そして2026年の抱負について「厚生労働省とともに、今年東京で開催される化粧品規制協力国際会議（ICCR―20）の準備を進めている。ICCR―20を通じて、ウェルビーイングの実現において重要な役割を果たし、社会にとって不可欠な存在である化粧品産業の社会的使命について理解が高まることを期待したい」と述べた。

続いて来賓を代表して経済産業省商務・サービスグループ商務・サービス政策統括調整官の江澤正名氏と、厚生労働省大臣官房審議官（医薬担当）の佐藤大作氏が挨拶した後、日本歯磨工業会の吉岡貴司会長（サンスターグループ執行役員）が乾杯の発声を務め、「人々の生活に寄り添い、健康をサポートする製品・サービスを通じ、化粧品歯磨業界が日本経済を牽引する産業となっていきたい」と挨拶を締め括った。

「喜びの産業」活性化へ一致団結

――西日本支部・村岡弘義支部長

日本化粧品工業会（粧工会）西日本支部は1月5日、大阪市内で新年互礼会を開催し、業界関係者650名超が参集した。西日本支部長の村岡弘義氏（ナリス化粧品社長）は、新年の挨拶で「歴代の先輩方が築き上げた伝統ある組織の重みを感じながら、新たな未来を切り拓くために全力を尽くしていきたい。私自身、化粧品産業は『喜びの産業』だと確信している。人々が美しくなりたいと願う心、健康に健やかに過ごしたいと願う気持ちに応え、生活に彩りを与えて心を豊かにする。人々の笑顔のために、全力で取り組んでいきたい」と抱負を語った。

「25年1月～10月までの化粧品出荷金額は前年比ほぼ横ばいで推移しているものの、韓国をはじめ海外勢との競争が激化しており、現場サイドでは数字以上の厳しさを感じているものと思う。今こそ業界が1つになって一致団結し、日本の化粧品を世界で存在感のあるJ―Beautyに押し上げていく必要がある。大手、中小という企業規模の垣根を越えて広く会員の方々の声に耳を傾けて、日本が誇るJ―Beautyの価値を世界へと届けていきたい」

来賓挨拶では、近畿経済産業局産業部製造産業課長の小谷純二氏、公正取引委員会事務総局近畿中国四国事務所取引課長の笠原晶子氏、大阪府健康医療部生活衛生室薬務課の枝川哲也氏が登壇した。乾杯の挨拶に登壇した関西化粧品日用品卸組合の吉田拓也PALTAC社長は、「約30年続いたデフレをようやく脱却してインフレに転換したものの、いわゆるコストプッシュ型のインフレで、資材や原料、人件費などの生産コストが上昇している。企業にとっては負担が大きくなり、難しい局面を迎えている。このコストプッシュインフレを脱却するカギは、『協働・共創』にあると考えている。脱炭素社会の実現など共通の課題・目標に対しては、協働で取り組んでいくことが必要になる。26年は『業界総資産拡大』という目標に向けて、心を1つに力強く成長できる1年にしていきたい」と語った。

巷間美風

今年は午年ということで、馬にゆかりのある鎌倉の鶴岡八幡宮へ初詣に出かけた。参拝を終えた後は、せっかく鎌倉まで来たのだからと、湘南の海の方へも足を伸ばした。振り返ると、昨年は蛇窪神社（品川区）へ、一昨年は「出世の階段」で知られる愛宕神社（港区）を訪れていた。

特に強い信仰心があるわけではないが、それでも年の始まりに神社へ足を運ぶのは、日本人が節目や区切りを重視してきた文化の延長なのだろう。七五三や成人式と同じように、「新しい年をきちんと迎える」という心構えを形にする行為のひとつが初詣なのかもしれない。

また最近、初詣にも様々な形があることを知った。元日や年明けに参拝するものという印象が強かったが、新年を迎える前に神様へ挨拶をする「幸先詣」という考え方もあるという。さらに、有名な大きな神社に行く前に、まずは地元や現在住んでいる土地の氏神様にお詣りすることが大切だとも聞いた。これまでを振り返ると、つい名前の知れた神社ばかりを選び、身近な神社にはほとんど足を運んでこなかった。これからは、まず身近な神社に感謝を伝えた上で、他の神社にも足を運びたいと思う。（竹）